幼児の教育　第108巻　第4号　平成21年4月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

新連載
ツブキ先生の
虫のつぶやき 1

好評連載
保育の中の物語 4
子ども文化の詩学 2

4
2009

第108巻　第4号　日本幼稚園協会

好評発売中

フレーベル館創立100周年記念出版

倉橋惣三文庫　＜全10巻＞

倉橋に学び、保育を極める。
日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋研究の第一人者・森上史朗の名著『子どもに生きた人・倉橋惣三』の改装版

倉橋惣三文庫⑨

倉橋惣三・その人と思想

坂元彦太郎／著

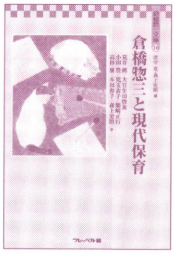
第一章　序奏
第二章　颯爽たる出発
第三章　多彩なる開花
第四章　華麗なる遍歴
第五章　豊饒なる結実
第六章　暗鬱なる洞穴
第七章　晩年の光芒
第八章　終曲

10809

18×12cm　216頁　定価1,260円(税込)

倉橋惣三文庫⑩

倉橋惣三と現代保育



荒井洌・大豆生田啓友
小田豊・児玉衣子
高杉展・本田和子
森上史朗／著

10810

18×12cm　200頁　定価1,260円(税込)

好評発売中!!

① 幼稚園真諦
倉橋惣三/著　柴崎正行/解説
18×12cm　148頁　定価1,155円(税込)

② 子供讃歌
倉橋惣三/著　森上史朗/解説
18×12cm　236頁　定価1,260円(税込)

③ 育ての心（上）
倉橋惣三/著
18×12cm　180頁　定価1,155円(税込)

④ 育ての心（下）
倉橋惣三/著　大豆生田啓友/解説
18×12cm　244頁　定価1,260円(税込)

⑤ 幼稚園雑草（上）
倉橋惣三／著　柴崎正行／解説
18×12cm　276頁　定価1,260円(税込)

⑥ 幼稚園雑草（下）
倉橋惣三／著　上垣内伸子／解説
18×12cm　220頁　定価1,260円(税込)

⑦ 子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（上）
倉橋惣三/著　森上史朗/解説
18×12cm　220頁　定価1,260円(税込)

⑧ 子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（下）
倉橋惣三/著　森上史朗/解説
18×12cm　204頁　定価1,260円(税込)

キンダーブックの
フレーベル館

＜わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第108巻　第4号

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第108巻　第4号

もくじ

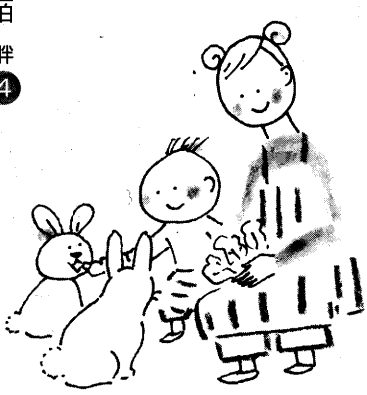
巻頭言
幼児の「発達」をどう見るか……佐伯　胖 4

新 ツブキ先生の虫のつぶやき 第1回
モンシロチョウも春の装い？……津吹　卓 8

子ども文化の詩学(2)
描かれた世界への入口
―絵本という〈場〉―……森下みさ子 12

保育の中の物語(4)
新しい世界の扉を開く……岸井慶子 18

園長のまなざし 第4回
春の1日……福永恭子 22



研究

「感情労働」から保育をとらえ直す……太田光洋 24

未就園児保育における親子遊びについて考える・京野尚子 32

絵本作りを通した自己理解……大須賀隆子 38

新 ひととき 第1回

何ごとも最初が肝心……松井るり子 44

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(4)

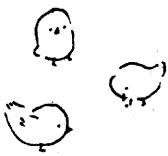
倉橋惣三の時代の「生活」を垣間見る……浜口順子 46

保育の現場から

子どもの姿が語るもの……山田徹志 52

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(28)

『ガラス絵』から見えるもの……佐治由美子 58



巻頭言

幼児の「発達」をどう見るか

佐伯 胖

「発達」という言葉を聞くと、読者の方々はどういうことを思い浮かべられるでしょうか。

「赤ちゃんが話しかけると笑ってくれるようになったよ」「自分で寝返りを打って、見たい物をじっと見つめるようになったよ」「もうはいはいができるようになったよ」などなど、「できなかったことが、できるようになること」のあれやこれやを思い浮かべ、そのように「できなかったことができるようになっていくこと」こそが「発達」なのだろうと考えるかもしれません。

でも、「それって、〝学習〟じゃないですか」と問われたら、どう答えられますか。いや、「学習」というのは、誰かが「教えようとした」ことについて「できるようになる」ことだけれど、「発達」というのは、別に誰も「教えていない」のに、子どものほうで「勝手にできるようになっていく」ことだと答えるかもしれません。しか

し、「学習」という言葉は、常に誰かが「教える」ことを前提にした言葉ではありません。「自学自習」という言葉があるように、自分で探求し、自分で学びとっていくことも立派に「学習」です。

いや、そういうアレやコレという、具体的な知識や技能の獲得（それこそが「学習」）ではなく、「一連の『そういうようなこと』がまとめて次々と学習できるようになる『基盤』のようなものが、子どもの中に整ってくることを『発達』というのです」、という答えがあるでしょう。伝統的に発達心理学でいう「発達」というのは、およそこういうようなこととされてきました。しかし、現場で保育に携わっている人たちにとっては、「さまざまな学習の基盤のようなもの」と言われても、あまりピンとこないのではないでしょうか。

そこでわたしは、「発達」をヒトがだんだん「人間になっていくこと」としたいのです。

ここで、あえてヒトとカタカナ書きにしたのは、生まれたての赤ちゃんを類人猿から進化したヒト科の動物として生まれた存在だとすることです。これは類人猿（たとえば、チンパンジー）と共通する特性をしっかり備えていることを前提とするのです。とくに、ここで「社会的であること」と「文化的であること」の二点だけを強調しておきましょう。近年の進化心理学は、ヒトがこの二点で「突出」して生まれ、それを一層「突出」させるべく成長していく動物であることを明らかにしています。つ

まり、赤ちゃんは、ますます「社会的」になり、ますます「文化的」になっていくということです。そこでそういう社会的・文化的になっていくこと全体をまとめて、「〝人間〟になっていく」こととらえるのです。

こうなると、赤ちゃんや子どもがいろいろ「できるようになる」ことを、ただ「アレができるようになった」「コレができるようになった」という「できるようになること」の項目が増えていくことばかりに目がいくのではなく、「あ、いよいよ〝人間〟になってきたぞ」「うーん、これこそ、〝人間〟だなあ」「ますます、〝人間〟になってきたよ」「ああ、これがほんとうの〝人間〟なんだ」という感嘆のまなざしで子どもの成長を見るようになるでしょう。それが、わたしの言う「子どもの〝発達〟を見る」ということです。

さて、子どもの発達を「人間になっていくこと」として感嘆のまなざしで見つめ、それを大切に育むというのが大人の役割なのですが、ここに、非常に怖い「おとしあな」があります。それは子どもを見ている大人の側に、つい「慾」が出て、「のぞましい人間」像を想定し、そこにどれだけ近づくかということにだけに関心を寄せることです。もっと怖いことは、「のぞましい〝人間〟」を、いつのまにか、「のぞましい行動特性」「のぞましい心情特性」「のぞましい身体特性」というような、「身に付けてほしいこと」のリストでとらえてしまうことです。これは結局、「発達」を個々のスキルの獲得とする「発達即学習」観に逆戻りです。ここからは、「発達を促す」と

いう名目での「早期教育」が直結しているわけで、「早期教育はおかしい」などと言っても、「発達を促進させてなぜ悪い」「むしろ、放っておくのは親（ないしは保育者）の怠慢だ」ということになります。

実は、最近の発達心理学は、もっと「怖いこと」を明らかにしてきています。それは、幼児が生まれてから、他者の行為の背後にある意図を理解し、他者の行為の意味を納得するとともに、それに協力するという方向で他者理解能力を発達させていく（まさに、社会的存在としての人間になっていく）のですが、学齢期に近づくにつれて、誰か大人（親や教師）が、「いいね、よく見てね、……（実演）、やってごらん」という「教示的構え」で臨むと、子どもは背後の理由や意味を考えることをあっさりと投げ捨てて、「言われたとおりのことを行う」ことだけに注意を向けて、まさに「いいなりになる」という特性を発揮させるということです。そこに、集団の力が働くと、それがもっと促進されます。これは「学校的〝教授〟文化」を、子どもなりに「先取り」しているといえるでしょう。「文化適応」への傾向が過剰に働き、「人間になること」が「いいなりの人間になること」に向かってしまいかねないのです。

保育というのは、子どもが本当の「よい人間」になろうとしている傾向をしっかり受け止めるとともに、うっかり間違うと「ヘンな人間」にも容易になりかねない危険性をしっかり踏まえたうえで「発達」を保証し、それをゆがめ阻害するものには、断固として抵抗していくことではないでしょうか。

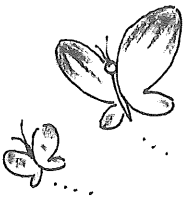
（青山学院大学）

第１回

ツブキ先生の虫のつぶやき

モンシロチョウも春の装い？

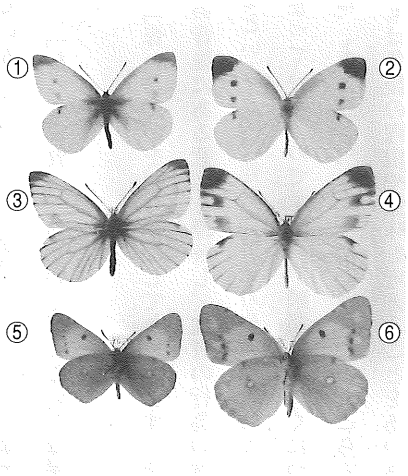
津吹　卓



春のチョウというと、何を思い浮かべますか。最もポピュラーなのはモンシロチョウでしょうか。モンシロチョウはご存じですか？　えっ？　白いチョウだからすぐにわかる？

では**第１問**です。**写真１の①～⑥のチョウのうち、どれがモンシロチョウですか？**　「モンシロチョウ」の意味は「紋のある白いチョウ」です。

モンシロチョウは、一年の間に何度も親になります。すなわち、寒い地方では二、三回、暖かい地方



▲写真１：モンシロチョウの仲間

では六、七回発生を繰り返します。乱暴な言い方をすると、春のチョウの子どもか孫、ひ孫が夏のチョウなのです。

答えです。**モンシロチョウは①と②**、そして③と④は仲間のスジグロシロチョウ（「すじの黒い白いチョウ」）です。**写真1**のチョウは全てオスです。

モンシロチョウの「春の装い」

では、**第2問**。**春に見られるモンシロチョウは①と②のどちらでしょうか**。そして、①と②ではどこが違うのでしょうか。よく見てください。翅（はね）の色は②の方が薄めですね。ところが、体の色は①の方は黒いのに対して、②は白っぽいのです。体の色の違いはなぜでしょうか。**答え**は①です。

なぜ「春の装い」になる？

ここで、モンシロチョウの気持ち（？）を考えてみましょう。日光浴をしている**写真2**の⑦を見てください。これは晩秋の十一月にセイタカアワダチソウの花に吸蜜に来たチョウです。翅を半開きにして、背中を太陽に向けて日光浴をしています。このときのチョウの気持ちは「太陽の熱を背中で吸収して体を温め、飛びやすい体温にしたい」です。

ヒトは体が自然に体温を調整するので、いつもほぼ同じ温度に保たれています（恒温動物）。ただ冬に運動するときは、体が冷えています。だから充分に体を動かして準備運動をしないと、うまく体が動かずにけがをすることがありますね。

それに対して、虫は周囲の温度が変化すると、その影響で体温も変化してしまうのです（変温動物）。しかし、虫もそれでは困ります。チョウは寒ければ日光浴をし、暑ければ熱射病にならないように熱を避けようとして移動します。さらには移動だけでなく、体の色も季節に合わせて変えているのです。学

生服にも夏服と冬服がありますね。夏は白く冬は黒っぽい。ご存じのように、夏は暑いので白くして熱を反射し、冬は寒いので黒くして熱を吸収して暖かくします。

チョウも同じです。春は気温がまだ低いので黒い体で熱を吸収しやすくし、夏は暑いので白い体で熱を反射して体温が上がりにくくしているのです。⑦のチョウは夏服ですか、冬服ですか。もうおわかりですね。黒いから冬服です。秋も寒くなるので、冬服で温めているのです。

では、体だけ黒ければよいのでしょうか。体温調節に関係する場所は主に体の背中の部分です。ここで熱を吸収して体を温めます。とくに、翅の付け根の飛ぶための筋肉の温度が大事です。では、翅の色はどうなのでしょうか。体のすぐ近くの翅の基部の熱は体に伝わります。翅の脈には血液が流れており、温かい血液は熱を運びます。でも、血液の流れはゆっくりです。だから体から遠い翅の部分を温めても、すぐに冷えて意味がないのです。そして夏服になるか冬服になるかは、幼虫時代の昼と夜の長さによるのです。

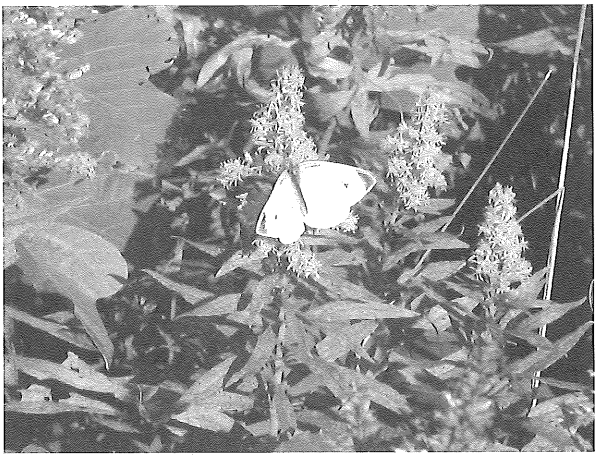


写真２：モンシロチョウ⑦の日光浴の姿勢

モンシロチョウの仲間の装いは？

では、モンシロチョウによく似たスジグロシロチョウではどうでしょうか。**写真1**の③④を見てください。体の色は、③が白く④が黒いですね。つまり、モンシロチョウと同じなのです。そして翅は夏の方が黒いけれど、体温に大きな影響はないのです。

写真３：モンキチョウ⑧の日光浴の姿勢

次に、⑤と⑥を見てください。これは、モンキチョウ（「紋のある黄色いチョウ」）の翅の裏の写真です。なぜ、裏なのでしょうか。モンキチョウの日光浴の姿勢は、モンシロチョウとは異なります。**写真3**の⑧のように、翅をたたんだまま横倒しになり、翅の裏側を太陽に向けるのです。翅の裏側の色と季節の関係はよいでしょうか。春（秋）は気温が低いので、翅の裏面基部を黒くして熱を吸収し、夏は暑いので翅の裏面基部を白くして熱を反射しているのです。

デリケートな色合いとデリケートな動きで、体温調節をうまくやるなんて、なかなかニクイと思いませんか。チョウも苦労して必死で生きているのです。

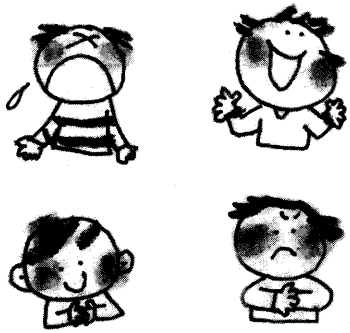
（十文字中学・高等学校〈理科／生物〉
十文字学園女子大学 児童幼児教育学科 非常勤講師）

子ども文化の詩学（2）

描かれた世界への入口

―絵本という〈場〉―

森下みさ子



◆「絵本」というモノ

絵本が子ども向けの文化財であることに、私たちはほとんど疑いをもたない。ブックスタートの運動が示すように、子どもの成育においても、親子の関係づくりにおいても、また読書の習慣をつけるうえでも、子どもの周りに適当な絵本があることは望ましいに違いない。しかし、生まれて間もない子どもにとって、実際のところ「絵本」とはどのようなモノとして現れるのだろうか。

「本を読む、というのは、よくよく観察すると、とても複雑な行動だ※」として、細馬宏通は、紙の

束に指の腹をあてて一枚だけつまみ上げ、残りのページを押さえつつ「めくる」ことの難しさを説く。そして、このような複雑な行動ができるようになる背景には、赤ちゃんの関心と、それを助けるお母さん（保育者）との共同作業があるのだという。

細馬によれば、ある時期（八か月ころ）から赤ちゃんは何かをめくって現れた面を見ることに関心をもち始めるらしい。ちょうどそのころに絵本が傍らにあれば、めくってみるには格好の素材である。しかし、先に記したとおり、紙の束をめくることは容易なことではない。そのとき絵本を支えて一枚ずつめくれるようにしてくれるのが、傍らにいる大人（保育者）である。保育者がしっかり絵本を支えていてくれるからこそ、赤ちゃんは小さい指で分厚い絵本を押すようにしながらもページをめくることができるのだ。それだけではない。めくると同時に、そこに描かれたものについて、保育者は積極的に指をさしたり、語りかけたり、話をしてくれたりするのである。

こうして、絵本は、まず何よりも赤ちゃんと大人（保育者）との「共同作業」を促す。これほど赤ちゃんと大人を一定時間「いっしょに居させようとする」モノはほかにないかもしれない。赤ちゃんのお気に入りのおもちゃなら、そのまま一人で遊ばせておいてもよいし、生活用品なら使い方を徐々に教えることになるだろう。逆に危険物は、即座に取り上げられてしまう。しかし、絵本に関していえば、赤ちゃんが関心をもつと同時に、大人はそれを開くのを手伝い、ある時間をかけて、その中の「描かれた世界」へと赤ちゃんを導くようにふるまう。

それは、大人が目の前に在る世界とは異なる「描かれた世界」の魅力を知っているからだ。今

ここにはない「描かれた世界」の中で、心がざわめいたり、ふるえたり、弾んだり、膨らんだり、はるか遠くまでさまよっていったりする、その楽しさを味わったことがあるからである。そして、その心の体験が、人生において励みや慰めや勇気や安心感を与えてくれたり、味わったり、考えたり、想ったりする豊かな生き方を育んでくれることを、自らが知っているからである。もし、大人がその悦びを知らずして、「描かれた世界」をただ学ばせようとするなら、それは幸せな共同作業にはなり得ない。

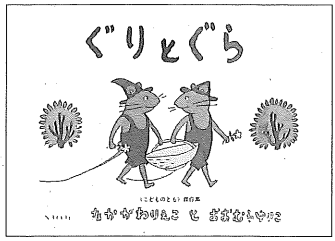
では、いったい絵本の中に息づいている「描かれた世界」の魅力とは何だろうか。

◆絵本に描かれた世界

子どもたちがすんなりと入っていって存分に楽しめる絵本は、必ずしも正しく美しく描かれたものではない。また、芸術的な意味合いをもった表現力に優れたものとも限らない。大人から見れば決してうまくはないつたない絵、アンバランスな構図やはみだした色、おおざっぱに見える描線や間違った遠近法で創られた世界が、しっかりと子どもの心をつかまえていることを、私たちは知っている。しかも、それらは常に、この世界に新しくやってくる幼い人たちを、ほぼ普遍的に引き寄せてやまない魅力となっている。子どもたちが大好きな絵本は、子どもが感じ取る世界をみごとにとらえて、魅力的な「描かれた世界」を提供し続けている。その意味で、子どもの心の羅針盤でもあるのだ。

たとえば、多くの子どもが好きになる『ぐりとぐら』の絵は、必ずしも美しいとはいいがたい。葉っぱの上に幹が乗っているような木は、小さな子どもが描いたような表現であるし、描かれた動

物たちは不自然な動きをしている。遠近法が使われていないせいか、野ネズミたちが木よりも大きく見える場面もあれば、卵の大きさも場面によってまちまちである。オオカミもシカも、ワニもゾウも、カニやトカゲやカタツムリまで、みんな集まってくる森などあろうはずもない。おまけにいくら大きいとはいえ、カステラがすべての動物にたっぷりとあてがわれ、まだ残っているなど、現実には考えられない。



▲『ぐりとぐら』
中川李枝子／文
大村百合子／絵、
福音館書店

しかし、子どもたちは、この絵本に瞬く間に魅了される。「ぐりぐらぐりぐら」とリズムよく現れた野ネズミたちが見つけた巨大な卵、それがみごとな黄色いカステラに膨れ上がって画面を満たすとき、見ている子どもたちから歓声が上がる。こんなに豊かで幸福な、ふっくらと黄色に輝く食べ物は見たことがない、それくらい満ち足りた空気が画面いっぱいに溢れているのだ。だからこそ、その糧はすべての動物が分け合ってお腹を満たすことに役立てられる。

そして最後、卵の殻さえも、ぐりとぐらの工夫によって車になり、持ってきた道具を入れて、身も心もいっぱいになった二人を家まで運んでくれるのである。

この絵本はいったいどんな力を発揮しているのだろう。美学的な意味や科学的な意識からは遠く、ただひたすら子どもの心に焦点を合わせて描

かれている。いや、ことは逆かもしれない。芸術や科学や教育さえも意識せずに、作者が心の内に潜む〈子どもの感性〉をよみがえらせ、響かせながら「絵本を産み出す」とき、子どもの心を常に喜ばせる力をもち得るのだろう。

◆絵本という〈場〉の体験

もちろん絵や言葉や話の展開だけが絵本を作り出しているわけではない。『ぐりとぐら』の絵本が、野ネズミの背丈に合わせた天地の低い横長の版型であるからこそ、画面の端から端まで居並ぶ動物たちを描くこともできるのだ。『ピーターラビットの絵本』は、小動物が織り成すファンタジーをのぞき込むかのように、手のひらに乗る小ささでなくてはならないし、『三びきのやぎのがらがらどん』は見開きいっぱいに大ヤギがはみでるような大きさでなくてはならない。版型が統一されている一般書と違って、絵本は実にさまざまな大きさと形をしている。

▲『ピーターラビットのおはなし』
ビアトリクス・ポター作・絵
いしいももこ訳、福音館書店
（福音館書店からシリーズで刊行）

絵本は、描かれた絵を内包して、一つの空間（世界）を手渡してくれるものだからである。子どもがその世界に招き入れられることはもちろんだが、同時に、そこに共に入り込み、共に楽しんでくれる人がいることを忘れてはならないだろう。絵本は、その空間が開かれるときからすでに保育者との共同作業によって、子どもと大人が共

有するところから始まるのだから。

作り手の心の中に居る〈子ども〉と、その欲するところを形にしようとする作り手、目の前の子どもに寄り添って共に「描かれた世界」を旅しようとする大人と、「描かれたもう一つの世界」に入り込んでいこうと目を輝かせている子ども、それらが作りなす〈場〉こそ、「絵本の世界」といい得るのではないだろうか。そこで得た体験が、将来の読書習慣につながることもあるかもしれない。

▲『三びきのやぎのがらがらどん』
(ノルウェーの昔話)
マーシャ・ブラウン絵
せたていじ訳、福音館書店

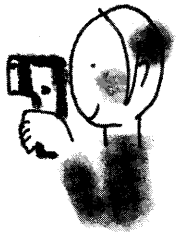
しかし、それ以上に大切なことは、大人と子どもが絵本を媒介として生まれた〈場〉を、共に、たっぷりと味わう時間をもち得ること、描かれた世界の中に手を携えてすっぽりと入り込む幸福を体験することであるだろう。それこそが、めくろうとする絵本を支えてくれたように、子どもの〈生〉をひそかに、しっかりと、支えてくれるに違いないのだ。

(白百合女子大学　文学部　児童文化学科

単著『おもちゃ革命』岩波書店、一九九六年、
『娘たちの江戸』筑摩書房、一九九六年など。
共著『文化の市場：交通する』東京大学出版会、
『ものと子どもの文化史』勁草書房、など。)

引用文献

細馬宏通「心体観測・共同作業としての読書」
『朝日新聞』二〇〇八年四月二十日　朝刊



保育の中の物語(4)

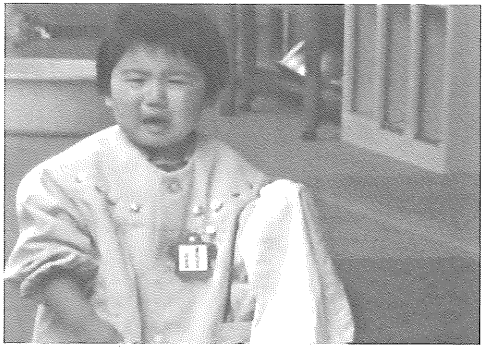
新しい世界の扉を開く

～入園三日目の姿から～

岸井慶子

入園三日目。子どもだけでなく、親や保育者にもたくさんの思いがあふれるときだ。自分の手を握って離そうとしないわが子への、母としての複雑な思い。無条件に自分を信頼し離そうとしないわが子に、愛おしさや置いて帰らねばならない不憫さが込み上げてくる。と同時に、ほかの子どもが母親と離れ友達とかかわる姿を間近に見れば、「なぜ？　私の育て方が悪かった？」という焦りにも似た気持ちが心をよぎる。一方、親が決めた入園で(自分が決めたわけではない)、一人知らない所に置いていかれる子どもの不安はいかばかりだろう。

三歳児のH子は母と手をつなぎ、泣いて登園してきた。手には大きなハンカチを握りしめている。やがてH子は、母の手を握ったまま動き出す。テラスで



年長組が世話をしているザリガニが小さなバケツに入っている。しゃがみ込んでザリガニをつかもうとして、思わず母の手を離す。母もH子の脇にしゃがみ一緒に見る。

この時期、ウサギや金魚やザリガニなどの果たす役割は大きい。みんな子どもの体よりも小さく、予想外に動き、命を感じさせる。しかも、ゲージや水槽やバケツに入っているその生き物は、決して自分には向かってこない。

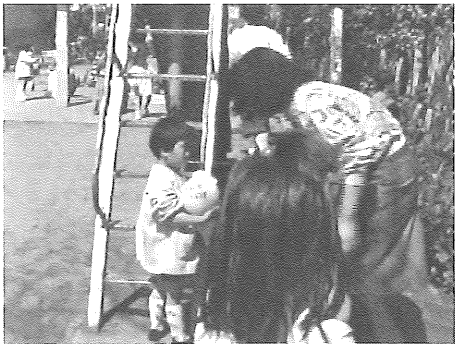
教頭のO先生が仲間に加わり、しゃがんで一緒にザリガニを眺めたり触ったりする。母が立ち上がる。O先生は母に「もう大丈夫。帰ってもいいですよ」と合図する。母は急いでその場から離れる。しかし、母が自分から離れたことに気づいたH子は驚天動地、飛び上がるようにして母の下に駆けだし激しく泣く。「なぜ？　お母さんと一緒にいたいのに、私をだますようにして私を置いて家に帰ろうとするなんて」と言いたげ。今までこんなことは一度もなかったに違いない。親子の別れはもう一度やり直しとなり、母はしばらくしてから家に帰った。

気づかないうちに置いていかれたH子は、泣きながら園庭へ母を探しに歩く。ハンカチで時折涙をぬぐいながら探し歩く。O先生はH子の後ろからつかず離れずの距離でついて歩く。

O先生はH子が母を探したい気持ちを受け止め、では一緒に探しに行こうと誘い、一緒に探しながらも、H子が園庭から外に出て行こうとするとやんわり止める。H子の気持ちを受け入れながらも、全面的に許すわけでもない。そこには微妙な気持ちのやりとりや駆け引きがある。許すか許さないか、YESかNOかではなく、その間でやりとりすること、付き合うこと、程よい距離をとることがとても重要だ。大人と子どもの関係の中で忘れられているように思う。

庭の端にある滑り台までやってくると、O先生は「H子ちゃん、先生、トイレに行ってくるからここで待っていてくれる？　ここにつかまって」と滑り台の手すりを示す。O先生の「一緒に行く？」の誘いを断り、H子は手すりとお守り代りのハンカチを握りしめながら一人で待つことにする。O先生が立ち去ると、両足をせいいっぱい〝つま先立ち〟にして、伸びあがってO先生の去った方を見ている。

けなげではないか。このけなげな一生懸命さを私たちはどのくらいわかっているだろう。保育者は自分がかかわろうとするときやかかわっているときの子どもの様子はよく見るが、自分がかかわった後や立ち去った後、その子がどんな思いで保育者を見つめているのか、そのことになかなか思いを至らせない。子どもが恋い焦がれて保育者を見つめる視線を忘れないようにしたいと思う。



すぐに戻ったO先生は「トイレがいっぱいだったの。これを持って、待っていてくれる?」とさも大切そうに抱えたボールをH子に渡し「また行ってくるね」と再びその場を離れた。今度は真新しいピカピカの黄色いボールを抱えて、H子はO先生を待つことになった。

「お待たせ。待っていてくれたのね。」と言いながら戻ったO先生は、ボールに向かって両手を伸ばす。H子の手からボールが落ちる、転がる。H子が追いかける、ける。O先生からH子にボールがけり返される。いつの間にか、近くにいた他児が仲間に入る。あの大きなハンカチはまだ片手に握られているが、他児とボールを追って走るH子の表情も体も確実にほぐれてきている。

ボールは、思いがけない方向に転がるので反射的に追いかけたくなる「動きを引き出す力」をもっている。これが人形だったらまた違った展開を見せただろう。子どもが新しい世界の扉を開く鍵はいろいろだ。小動物かもしれない、玩具かもしれない。もちろん保育者や他の幼児などの場合もあるだろう。何がその子にとっての鍵になるのかわからないが、一緒にゆっくり探したいと思う。同時に、鍵となる物の「質」と「意味」について考えたいと思った。これは、保育者が経験的に理解していることなのだが、もう少し整理してみたいと思う。

（鎌倉女子大学短期大学部）

園長のまなざし

第４回

春の１日

福永恭子

四月、いつの間にか園庭は桜やチューリップが咲き、もみじやいちょう、メタセコイアが芽吹いて美しい季節となっています。

朝、門に立って子どもたちを迎えた後、私は（さあ、お手伝いに行かなくちゃ）と、いそいそと年少組の部屋に向かいます。部屋の前でなかなか離れられない子どもの母親に目で合図を送り、離して部屋に連れて入ると、その子どもは泣くかと思ったらけろっとしていたり（Ａちゃんもすっきりするきっかけを待っていたのね）、部屋で大きな声で泣く子どもを連れ出して手をつないで歩いていたら、大きい組の子どもがしていることに興味をもって気分転換になったり（やっぱり子ども同士ってすごいなあ）。

年少児が早く帰って一息ついた直後、「えんちょうせんせい、たたかいしよう」と年長組の男の子から声がかかりました。戦いごっこができるようなった男の子がまず相手に選んだのは、活発な友達ではなく園長

先生くらいがいいとの判断だと思います。私はフットワークよく（？　まだ負けないわ）、逃げたり、追いかけたり、新聞剣を合わせたり……。子どもの表情を見ながら、私も楽しんでしまいます（しなくちゃいけないことも書類も溜まっているけれど、必要とされているときにはできるだけ……）。

不思議なもので、同じような一年でも、毎年毎年こんなに違うのはなぜなのでしょうか。子どもたちが、〝今、ここで新しく生きているから〟〝今を一生懸命生きているから〟ということを教えてくれます。子どもたちから元気をもらい、現在も初めての経験ができるのは、この仕事ならではのよさだと思います。

今年度も、子どもたちが健康で、好きなことを見つけて夢中になって遊んでほしい、自分らしさを出して過ごせるようになってほしい、そして友達と楽しい園生活を送れるようにと願っています。

（東京都　もみじ幼稚園）

研究

「感情労働」から保育をとらえ直す

― 同僚に対する感情ワークを中心に ―

太田光洋

●「感情労働」って何?

かつて、倉橋惣三は、「子どもの生活」に対して「細やかな心遣い」を向けること、「子どもの生活に対して常に気が利いていること」が、幼稚園の先生の役目であると言っています[1]。保育者の目は何よりも子どもの生活に向けられ、それに対して敏感であることが求められるといえましょう。

保育の中で、保育者は、子どもが、安全で守られているという被包感や自由感が感じられ、自分を見たりかかわってくれていると感じられるように、感情をコントロールし、表現しています。このように、職業として感情をコントロールし、相手に特定の感情状態を引き起こす人とかかわる仕事を、アメリカの社会学者、アーリー・ホックシールドは、「感情労働（emotional labor）」と定義しています[2]。保育は、保育者が感情を管理し、表現しながら、子どもや保護者を育てていく感情労働であるといえま

す。ここでは、感情労働において行われる感情管理、感情操作という意味で、もう少し広い概念である「感情ワーク（emotional work）」という言葉を併せて使いたいと思います。

保育をこうした観点から見ると、おもしろいことが見えてきます。たとえば、感情労働という観点から保育者の仕事を見れば、その感情が向けられるべき（感情ワークの）対象が、「子ども」から「親」に移ってきていると見ることができます。また、子どもでも親でもなく、「同僚」や「先輩」に向けられているようにも映るのです。

●保育における人間関係と感情の問題
～いま、なぜ「感情労働」か？

少し話が変わりますが、保育者の人間関係やそこで働く感情にかかわって、かねてから気になっている問題があります。

保育者の誰もが「子どもたちのためによい保育がしたい」と思い、日々の保育を振り返り、また機会を見つけては学んでいます。しかし、これだけ盛んに保育研究が行われ、研修会が行われているにもかかわらず、そこで学ばれたことが充分に保育に反映されていないのではないか、という疑問がぬぐえません。筆者自身、幼稚園教諭として、あるいは幼稚園長として保育現場に身を置く中で、それぞれの保育者の学びが、その内容ではなく、むしろほかの保育者との関係、保育者集団のあり方によって、保育に活かされるか否かが決まってしまうのです。簡単に言えば、事の是非よりも保育者の人間関係、そこでの感情に大きく左右されるということです。

子どもには個性や創造性、多様性を求めるのに、必ずしも同僚に対してはそうではない。保育者は子どもとのかかわりの中で絶えず自己決定を求められる自律性の高い仕事であるはずなのに、その日常的

な行動は逆で、「みんないっしょ」「ほかの先生方に合わせる」というように同調的・画一的で、保育においても「隣のクラスに合わせる」ことが議論もなく行われることもよくあります。こうした矛盾は、保育現場が抱える深刻な問題といわざるを得ません。

また、保育者の退職理由の上位には常に「職場の人間関係」が挙げられます。事実、実習に行った学生や就職した卒業生から保育者の人間関係にかかわる疑問や悩み相談を受けることも少なくありませんし、保育士が、対「子ども」、対「親」以上に、「職場の人間関係」にストレスを感じていることを指摘する実証的な研究もあります[3]。

こうした問題は、しばしば「女性の職場だから」とか「幼稚園はそういう所」というような言い方をされることによって、これまで踏み込んで検討されることはありませんでした。筆者自身、この問題を実証的に扱う視点や方法をもっていませんでしたし、経験や年齢もこうした研究を行うのに耐えられるものではなかったと思います。しかし、保育の状況が困難になることで、拠り所としての保育者の人間関係や組織の重要性を見直す必要が切実になり、近年の質的研究の方法論が模索される中で、実証的にアプローチする環境も整ってきました。

「感情労働」という視点は、私たちに新たな視点から保育を見直す切り口を提供するもので、これまでと異なる観点から保育の問題を見つけ、保育を変容させる可能性のある切り口ということができると思います。

● 保育者の目はなぜ子どもから離れるのか

保育者が子どもに濃（こま）やかな目を向けることが難しくなってきているのはなぜでしょうか。なぜ、感情ワークは保護者や同僚に向けられるようになったのでしょうか。

子どもよりも保護者や同僚に保育者の心遣いが向けられるようになった理由は、少し考えればすぐに幾つか思い当たります。たとえば、共働き世帯が増加や長時間保育が当たり前になり、子どもが家庭で過ごす時間が少なくなったことによって、これまで家庭が担ってきた教育機能が幼稚園や保育所に求められるようになっていることは、実感していることだと思います。「以前は、入園前にできて当たり前だったことが、今はできない」というように感じられることです。

あるいは、子育て困難を抱える保護者への支援や親のリフレッシュを支える一時的な保育など、保育に対する新たな役割が保護者や社会から要請されるようになってきています。核家族で育ったかつての子どもが親世代となり、平成九年を境に共働き世帯が専業主婦世帯を上回るようになり[4]、その差は増え続けています。この一〇年ほどの間に日本の「親」や「家族」像は大きく変化しているのです。それに伴って、保育の社会的な役割も変化しつつあると考えられます。前に述べた保育における感情の問題に加えて、社会の変化もまた保育者の目を子どもから遠ざけている要因といえます。

● インタビューから見えてきたこと

ここまで見てきたような厳しい状況の中で、保育者を支えるものは何でしょうか。もちろん、子どもの成長や遊びに夢中になる姿、保護者との共感など、いろいろ考えられます。ですが、おそらく保育者の日常を支えるのは、毎日の保育（生活）を共にする保育者仲間です。だとすれば、同僚に向けられる感情ワークが、どのような内容や質をもっているかを明らかにすることがまず必要だと思います。ここでは、保育者の同僚に対する感情ワークに絞ってインタビュー資料を拾いながら見てみましょう。

「最近は、子どもとどうかかわったらいいかわからない親が多くて、いろいろなところに子どもと出かけたりするんだけど、子どもは子ども、親は親っていう感じで、経験も感情も共有していないみたい。親子関係が安定していないと入園してから大変で。親もどうしていいかわからないから……すごく気を使わなければならない親が増えています」（幼稚園教諭、四十五歳）

社会の変化とシンクロして、親も変容し、そのことが親に対する感情ワークの内容を変えることを要請しています。相対的に、そこに多くの注意を向けざるを得なくなってきたということができると思います。

さらに、保育者が置かれている労働環境が不安定になっていることも無関係ではありません。

「前の職場で、私、いつ自分が立たなくちゃならないだろうと思って、先輩の先生たちばっかり気になって、落ち着いて自分の仕事に集中することができなくて……。だから、書きものは絶対家に持って帰ってしてたし。今でも職員室では落ち着かない感じ……」（幼稚園教諭、三十五歳）

この先生は、幼稚園での勤務経験があり、出産のために一時職を離れた後、非常勤教諭として「前の職場」である幼稚園に三年勤務したのですが、先輩の先生に常に気を使っていたと言います。

ほかにはこんな声も聞かれました。

「三歳児だからその活動はちょっと難しいし、四、五歳児と違って、もっと遊びの感じでゆったり進めたほうがよいと思うんだけど、（先輩の）○○先生がやるっていったら、それに合わせなく

ちゃいけなくて。子どもがかわいそうなんですけど……」（幼稚園教諭、四十五歳）

この保育者の場合、目を向けるべき方向が違っていることは明らかですが、前述したように子どもではなく、保育者に対する感情ワークが、子どもに対するそれに優先してしまっています。この問題と似た回答を、実習を終えた学生に対するインタビューでも耳にし、実習からその萌芽が見られることがわかります。

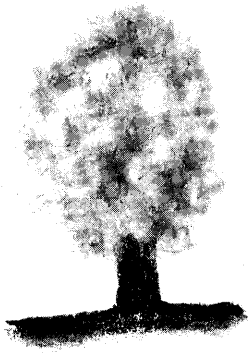
「担任の先生の目がすごく気になって。なんかいつも自分が気が利かないなって思い知らされた感じで。迷惑かけちゃだめ、みたいな。その、園の流れの中で私がいることで遅れたりとかペースが乱れたりしちゃいけないとすごく思ってたから。それに対して自分が思うように行動できなかったし、先生の期待に応えられてないって思ってたから」（大学三年生、A）

「『すみません』や『ありがとうございます』も『ご指導いただきありがとうございます』ってそんなに言わなくてもいいって思うくらい言ってた。子どもが『えっ』て目を見張るくらい」（大学三年生、B）

これらに共通するのは、その判断や行動が保育者自身ではなく、ほかの保育者や実習担当保育者に委ねられていることです。この実習生は、自分ではどう行動してよいかわからずに不安でいながら、表面的には保育者から「一生懸命動く学生」として見えるように行動しています。いわば、実習生は自分が注意を受けたりせずに済むように感情を操作しているといえます。ホックシールドは、このような操作

を「感情管理」といい、心の中で思う内面と異なる行動を他者に見せる場合の行動を「表層演技(surface acting)」と呼んでいます。保育者としての成長は、このような表層演技が、行動が内面の素直な表現である「深層演技(deep acting)」になっていくということもできます。しかし、保育における活動や保育者の行動のあり方や意味について考えたり、理解したりすることがなければ、表層の行為をまねるだけに終始するしかありません。

保育について未熟な実習生や新任保育者は、同僚をモデルとして多くを学びます。しかし、保育者が自律的に判断し、行動していくためには、保育についての基本的な知識や教養が必要であり、それをもとにして保育者同士が話し合うなどして、その意味を問うことなしに保育者として育つことは難しいと思われます。現実には長時間保育などによって保育の準備に充分な時間が取れなかったり、保育者同士が時間を共有して子どもや保育について学び合うことも難しくなってきています。



「私たちは実践研究がすごく勉強になったんです。……先輩の先生たちは、子どもにとってよいこととか、新しいこととか、研究発表なんかもそうなんですけど、結局、新しいことなんかは面倒くさいからしないっていうのが最近見えてきて……。だから、(私は)辞めちゃおうかなとか、でも辞めるのも悔しいなとか……。悩んでます」

(幼稚園教諭、二十六歳)

この先生は、研究発表を通して保育を見直す機会をもったことで、こうした同僚の姿が見えるようになったのだといいます。同時に保育を深く考え、一緒に学んだ一歳違いの同僚への信頼を深めています。実践研究を通じて、保育や子どもについて振り返り、よく考えること、ほかの保育者と話し合うことは、保育者のあり方を問い直したり、保育そのもののあり方や視点を確かなものにしたりする力になっていることがうかがわれます。

● 終わりに

「そうそう、こういうことある」とうなずきながら読んでいただけたなら、現実とあまりずれていないといえるでしょう。私もまずは、感情労働という視点から問題を見つけ出すことから始めたいと思います。ここで示された問題は保育現場の組織の問題としても、保育者個々人の問題としても考えることができます。過敏になる必要はありませんが、保育者の感情ワークに意識的になることが、その原因や問題の解決を探り、子どもたちに濃やかな目を向ける手がかりを得ることにつながるのではないかと思います。

（九州女子大学）

引用文献

1 倉橋惣三／著　津守真／編　森上史朗／編『倉橋惣三文庫1 幼稚園真諦』フレーベル館、二〇〇八年、五十七頁

2 A．R．ホックシールド／著　石川准・室伏亜希／訳『管理される心』世界思想社、二〇〇〇年

3 垣内国光・東社協保育士会／編著『保育者の現在』ミネルヴァ書房、二〇〇七年 六十五頁

4 総務省「労働力調査特別調査」（昭和五十五年～平成十三年）および総務省「労働力調査（詳細結果）」（平成十四年～十七年）

研究

未就園児保育における親子遊びについて考える

― 保育臨床的かかわりを媒介に ―

京野尚子

●二歳児って何ておもしろいのだろう

私は、学生時代、「二歳児は、喜怒哀楽があって何ておもしろいのだろう」と感じていました。しかし、そのころ二歳児のお母さんたちは、

「ああ、この子と離れて一人の時間が欲しい！」とよく言っていたのを思い出します。当時、学生だった私は、「こんなにおもしろいのになぜ？」と感じていました。

その後私も母親になり、いざ出産してみると、「24時間営業の育児」と、子どもの気分の波に翻弄される「二歳児の母親」の現実に直面しました。そのとき初めて、いかにこの年齢の子育てが大変であるか、これが噂の「テリブル2」だと実感したのです。子育ては「かわいい」だけではできない、命を守り育むことの重みを実感しました。

私が子どものいる現場に来て、約二十年以上になろうとしています。最初は、東京都の公立相談室で臨床心理士として約八年、その後は、看護専門学校や、短大で教鞭を執りながら未就園児対象の親子支援の現場に現在まで携わっております。

教育相談の現場にいましたときに日々感じていたのは、小中学生に見られるさまざまな心の問題は、その子どもたちの記憶にない二歳あたりの親子関係のボタンの掛け違いがずっともち越されてきたことにあるのではないかということでした。このことから、ますます、未就園児への関心は尽きないものとなったのです。

近年、未就園児クラスを立ち上げる幼稚園も増え、ますます二歳代の親子への関心が深まっています。

また長年二歳児の現場にいまして私が強く懸念していることは、専業主婦のお母さんの育児への負担感が増え、また、皆「よい子に育てなければ」のプレッシャーを感じながら頑張りすぎてしまう現状です。お母さんたちの悩みを聞いていますと、「親子で友達が近くにいない」、あるいは「本音で子育ての悩みを聞いてくれる人がいない」など、育児への孤独感が見られ、しかもお母さん自身が、自分の実母からも「よい母親にならなければいけない」という無言のプレッシャーを感じているという話をよく聞きます。こうした暗黙の「よい母親像」「よい子育て像」への焦りが、お母さんたちの子育てをより難しいものへとかりたててしまっているのではないかと思われます。

そこで、未就園児クラスでのある日の出来事をあげて、今のお母さんと子どもたちにとって私たち保育者は何を求められているのか考えてみたいと思います。

なお、プライバシーへの配慮から、多少内容を変更して本質はできるだけ損なわないようにしています。

● ある日の出来事から

未就園児クラスでのある日の出来事です。

A子ちゃんは、お母さんと手をつないで教室に来ました。私がお母さんに「A子ちゃんは、どんな遊びが好きなのかな?」と聞くと、しばらく考えてから「何だろう。いつも一人遊びしているし、お絵かきじゃないかしら……」と答えました。

そこで私がテーブルに画用紙とクレヨンを用意すると、お母さんは即座に熱心に絵を描き始めました。A子ちゃんはというと、クレヨンを持ったまま、ぼんやりと遠くを眺めているのです。

未就園児クラスの教室では、いろいろな自由遊びが展開されていて、皆自分の好きな遊びを親子で思い思いに楽しんでいました。

A子ちゃんのお母さんの画用紙は、アンパンマンやドキンちゃん、メロンパンナちゃんなど、アンパンマンキャラクターでにぎやかに埋め尽くされていました。

ところがA子ちゃんの方はというと、小さな丸が一つだけ。A子ちゃんの視線の先を見ると、新聞紙で作った剣での戦いごっこを楽しむ親子や保育者の姿が見られました。そこには、悪者になってガオガオと怪獣になっている元気なB男君のお母さん、それをうれしそうに新聞で作った剣でやっつけようとするB男君やほかの子どもたちの姿がありました(未就園児クラスのよいところは、同じ部屋の中でいろいろな遊びを楽しむ姿を見られることです)。

A子ちゃんがあまりに真剣に見ていたので、「A子ちゃん、戦いごっこが好きみたい」と私がお母さんに言うと、即座にお母さんが、

「いいえ、乱暴な遊びは好きじゃないです。私の母親も嫌いですし」と言いました。

A子ちゃんがあんまり楽しそうに怪獣ごっこを見

ていたので、私は今度は、
「A子ちゃん、戦いごっこ楽しい?」と、A子ちゃんに言いました。
　すると、とっさにA子ちゃんは、お母さんの顔を見て、それから私を見て（余計なこと言わないで）とでも言いたげな鋭い視線を投げかけました。しかし、相変わらずその視線は怪獣ごっこに釘付けです。クレヨンを持つ手を止めて、食い入るように戦いごっこを見ているA子ちゃんの様子は、とても楽しそうでした。A子ちゃんが画用紙にその後も何にも描かずにいるので、
「お母さん、A子ちゃんいい顔してるね!」と言って、私はお母さんにA子ちゃんの横顔を見てもらいました。するとお母さんが、
「あら、A子が笑ってる。いつも何が楽しいのかわからなくて……」と言いました。
「A子ちゃんは、やっぱり戦いごっこに興味があるんじゃないかしらね」と私が言うと、お母さんがB男君のお母さんを見て、
「B男君のお母さんすごい、怪獣になっている!何だか、懐かしいわ」と、ぽつりと、話をされたのです。
「私、子どものころお転婆だったんです。よく母に『ああ、お姉ちゃんはとっても女らしいのにあなたは男みたい』って言われるのがいやでした」
　私が新聞紙で作った剣をA子ちゃんとお母さんに渡すと、お母さんは
「よし、やっつけるぞ!」と言うと、遊びの中に突進していきました。
　するとA子ちゃんもすっと立ち上がり、剣を持ってお母さんの後から歩き出したのです。
　A子ちゃんは剣の扱い方がわからなくて戸惑っていたので、私が後ろから支えながら戦いに挑むと、いつしか夢中で遊んでいました。活き活きとしたお

母さんを見て、A子ちゃんに笑顔が見られるようになりました。

帰り際に、お母さんがこんな話をしてくれました。「A子は、おとなしい子どもだと私が勝手に思い込んでいたけれど、本当は、私に似て、やんちゃで元気な子なんですね！」と。

このような事例は、決して珍しくありません。この事例から推測されることは、A子ちゃんのお母さんが気持ちのどこかで「女の子は、おとなしくて荒々しい遊びなどするものではない」という固定観念やイメージにしばられ、気がついたらまだ二歳であるわが子にそのイメージを押し付けてしまっていたのではないかということです。しかし、親子遊びをする中でむしろお母さん自身が、実はそうした固定観念にしばられ、実母から「あるがままの自分では認めてもらえない」と思い込んでいたことに気づいていったのです。

私はよく「母子まるごと抱っこ」というのですが、私たち保育者は、お母さんも子どもたちをも外側から心身ともにしっかりと支えてあげながら、「そのままでいいのよ、もっと肩の力を抜いてあなたらしくあればいいのよ」というメッセージを伝えてあげることが必要なのかもしれません。

● 身も心も解放されたA子とお母さん

この事例でも、A子ちゃんは戦いごっこがやりたくて、「もっとはっちゃけたい。まさに暴れん坊の二歳児らしくはじけたい！」と思っていたのでしょう。未就園児クラスという集団に参加したことで初めて母子で解放されて、同じ子育てをするほかのお母さんたちとも出会うことができ、また保育者との遊びを通して自由さを取り戻していくきっかけができたように思います。

また、この事例を通して私が痛切に感じること

は、がんばりすぎるお母さんたちに、「そのまんまのあなたでいいのよ、無理をしないでいいのよ」というメッセージを与えながら、世間体や社会常識の枠にとらわれることなく、やりたいことをやるというお母さんらしさを取り戻していくことを提案する必要性です。

現代は、育児の情報があちらこちらに氾濫していて何を指針にしたらよいのか戸惑いがちです。まず

はお母さんたちが、もっと身も心も自由に解放される場があることが大切ではないでしょうか。

お母さんも思いきり童心に返り、もう一度子ども心を取り戻すことができるような時間をもつこと、それは決して誰かに評価されるものではなく、その人らしくいられる、そんな楽しい親子遊びの時間をもてるように工夫していくことではないかと考えています。

子どもたちもお母さんをも活き活きとできるようなごっこ遊びが楽しめる、そんな未就園児クラスの存在はより貴重な場になってくるでしょう。

親子の絆をしっかりと再確認するためにも、私たち保育者がその支援のお手伝いをすることができたら幸いと思います。

（大妻女子大学短期大学部講師・
鎌倉女子大学幼稚部）

研究

絵本作りを通した自己理解

― 保育者養成校の学生から実習園の子どもたちへ ―

大須賀隆子

● 自分の中の「子ども性」とつながるために

私は、二〇〇七年より都内の保育者養成校（短期大学）に勤務しております。保育者は子ども理解のために、自分の中に息づいている「子ども性」とつながる回路を活き活きと保ち続けるとともに、大人として今を生きている自分のあり方にも自覚的であることが求められると考えます。私は保育者養成校に勤務する前は区立幼稚園と小学校の相談員をしていましたが、対人援助職の一つである臨床心理士にとってもさまざまな次元における自己のあり様についての理解が前提となります。

そのようなことから、私が現在保育者養成校で担当する「総合演習」のテーマは「自己理解」です。この「総合演習」では一年間かけて「自分史」をつづることをゼミ生に課しています。

二〇〇八年の四月から五月に、「自分史」に本格的に取り組むための助走という意味で絵本作成を課しました。「六月の幼稚園実習で出会う子どもたちのために、世界でたった一つのオリジナル絵本を作りませんか」と、ゼミ生に呼びかけたところ「嫌だあ～、無理イ～、そんなの描けない！」という数人

の声が上がりました。彼女たちの昨年作成した絵本読書ノートが充実していただけに、これは意外な反応でした。しかし、絵本の作り手となることはゼロから創造する主体になることであり、学生によっては未知なる世界のドアを開ける体験になるかもしれないと思い直して、次のように話してみました。

「幼稚園児の自由な遊びのイメージの中に入っていくための実習準備として、いわば心の柔軟体操として絵本作りを提案しているんですよ……」。すると、抵抗していた学生も渋々承知したようでした。ほとんどの学生が絵本作成は初めてということなので、作家で川村学園女子大学准教授の上橋菜穂子氏がNHKの番組『課外授業ようこそ先輩（二〇〇八年一月十九日放送）』の中で小学生に提案された方法を採用しました。まず、主人公の姿を描きます。その主人公の横に、名前、身長、体重、性格、住んでいる所などを書き入れます。その次に、主人公にとって最も楽しい食事場面を描きます。上橋氏によれば、食べ物ができるまでの過程を考えることによって「ファンタジーの世界」にリアリティ（整合性）が創り出されるとのことでした。

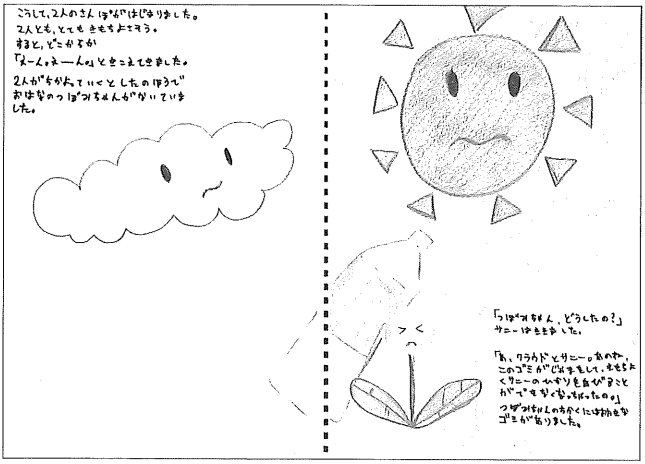
●自信につながった絵本作成

たとえば、雲と太陽を主人公とした『クラウドとサニーのおさんぽ』という題名の絵本を作ったゼミ生は、主人公らの食べ物を酸素や炭素、水素、窒素などとしています。この絵本のテーマは環境問題です。大気汚染の中で苦しむ花の「つぼみちゃん」を、「クラウド」と「サニー」が、風の「フーじいさん」の力を借りながら知恵を出し合って助けるというストーリーです。作者のゼミ生に幼稚園実習が終った七月にインタビューを行ったところ、次のように語りました。

「絵本を作るなんて最初は面倒くさいと思っていた

けれど、作っているうちに楽しくなってきました。絵も文も得意ではないと思っていたんですが、母園の子どもたち（四、五歳児）に『クラウドとサニーのおさんぽ』を読んだところ熱心に聴いてくれ、先生方からも『ぜんぶ自分で考えて作ったなんてすごい』とほめられました。今回の幼稚園実習では、子どもたちのトラブル解決の援助ができたこともあって、少し自信が出てきました。でも、まだまだ積極的に子どもたちにかかわっていくことができないので、それが私の課題です」

この学生は、幼稚園実習の後自己開拓して探した肢体不自由児施設で実習を行い、その後「自分史」の執筆に取り組み始めました。彼女の「自己理解」の鍵は絵本の主人公である「クラウド（性別は男性、年齢五歳）」と「サニー（性別は女性、年齢二歳）」の対照的な性格記述にあるように思われます。「クラウド」は「おとなしくて、しっかりしている。サニーの暴走を止められる」のに対して、「サニー」は「活発で、元気いっぱい。暴走すると止まらない（『これだ』と決めたものに対して突っ



▲絵本『クラウドとサニーのおさんぽ』

走ってしまう)」と書き込んでいます。そして、この二人の主人公を支えてくれる存在が風の「フーじいさん」です。「フーじいさん」について考えてみることによって、何か気づきがあるかもしれません。さらに、花の「つぼみちゃん」が最後には美しい大輪の花へと成長していきますが、彼女にとっての「花」の意味を考えることによって、どのような保育者になりたいのかを改めて考える契機になるのではないかと期待しています。

● 自分の思いをまとめあげる内的体験過程

さて、当初の反応どおり、何人かの学生にとっては今回の絵本作成は辛い作業だったようです。たとえば、『サンタさんの帽子』という題名の絵本を作ったゼミ生は、伝えたいテーマについては比較的早く考えついたようですが、それを伝えるためのストーリーをどのように作り上げていけばよいのか、どんな主人公がふさわしいのかということで思い悩んだようでした。そのテーマとは「一人でも多くの子どもが、素直な心を失わずに生きていけますように」という願いです。呻吟しながらも絵本を完成させたその思いを、あふれるような解放感とともに彼女は次のように語っています。

「苦しかったんですけど、自分が絵本を作ったことで、絵本には作者のねらいがあって、これを子どもに感じてもらいたいということがわかりました。それ以上に、絵本など到底作れないと思っていた自分が、何とか最後までやり遂げることができたという、達成感がありました」

彼女は、自分自身の内側で不確かな形で見え隠れしている悩みや思いをすくい上げ、展開させ、まとめ上げる過程をやり抜いたことによって、時には制御不可能に感じられることもある自分自身を自分の力で制御できるのだという自信を得たのではないか

と推察しています。この学生については、二年生になってから短大で学ぶ姿勢に変化が見られるようになったと感じていました。彼女自身がその変化を次のように語っています。

「二年生になってから、やっと自分に合った友達を見つけた感じです。個人でどんな環境にいても自分の意思を貫けばできることだったのかもしれないんですけど、私の場合、今いる友達とは静かに講義を受けることができるし、勉強する体勢もちゃんととれるようになりました。自分の考え方も変わって、それはいろいろ友達からもらったものだろうなと思うんです」

友人関係が変わって彼女が変わり始めた時期と、絵本作成に取り組む時期とが重なったことが幸いだったようです。『サンタさんの帽子』では、サンタさんの存在を信じる主人公の「めめ」（ネコ、年齢五歳）が、友達三人とサンタさんが本当にいるのかをめぐって口論をします。そんなある日、「めめ」はサンタさんの帽子を偶然見つけ、危険を冒してこれを手に入れます。すると、帽子を失くして困っていたサンタさんが「めめ」の目の前に現れ、「これでみんなにクリスマスプレゼントを渡しに行ける、ありがとう」と感謝します。クリスマスの夜、サンタさんがトナカイの鈴の音を鳴らしながら「めめ」の住む街にやって来て、「めめ」の友達も窓の外にサンタさんの姿を見たことによって、「めめ」と友達は仲直りをすることができた、というストーリーです。

小さな子どもたちの世界では、サンタさんが本当にいるかいないかは重大な関心事です。作者は、「めめ」のお母さんに「サンタさんを信じている子どものところにサンタさんは必ず来てくれるのよ」と言わせています。『サンタさんの帽子』に込めた作者のテーマは先に述べたとおりですが、主人公の

「めめ」に寄り添って読み直してみますと「私が信じていることを友達にも同じように信じてほしい」という切なる願いが込められている物語であるように思われます。この絵本の作者が二年生になって親しくなった友人たちは、彼女が信じてほしいと願っていることを理解してくれている人たちなのかもしれません。

六月に幼稚園実習を終えた彼女の振り返りのテーマは、子どもたちとの信頼関係でした。実習園の先生のご指導をいただきながら、彼女なりに心をくだいて一人ひとりの子どもとかかわったようです。ところが、どうしてもうまく関係が結べない子どもが一人いました。なぜだろうと思いながら登園した朝、その子どもが話しかけてきたといいます。その体験が鮮烈であったこともあり、「子どもたち一人ひとりとの信頼関係が日々生まれてくるのが、体でわかるというか、目に見えてきた、とても実りのある実習でした」と日誌を結んでいます。

絵本作りに取り組むことを通して、自分自身の思いをまとめあげることができたという内的体験と、現実生活の中で友人たちに支えられることによって自分自身をより一層肯定できるようになったという実感とが、実習園の子どもたちとの信頼関係をつくる過程に敏感に反応させたのではないかと推察しています。これらの体験過程を「自分史」の中でていねいに記述していくことによって、さらにじっくりと、子どもたちとかかわることのできる保育者となって現場に出ることができるのではないかと期待しています。

（淑徳短期大学　こども学科）

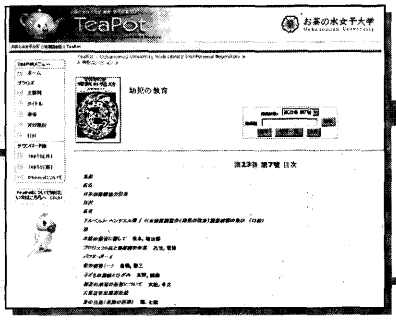
参考文献

蘭香代子　『童話療法―「物語」と「描画」による表現療法』　誠信書房　二〇〇八年
浜口順子　「子どもの内なる世界の理解」（『幼児理解と保育援助』より）　ミネルヴァ書房　二〇〇三年

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（4）

倉橋惣三の時代の「生活」を垣間見る

浜口順子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

昨年の二〇〇八（平成二十）年六月から本誌バックナンバーのインターネット公開が始まり、本原稿執筆時現在では、一九〇一（明治三四）年の創刊号から、一九五三（昭和二八）年までの約半世紀分が、ネット上で閲覧可能になっています。この四月号が発行されるころには、それ以降のものも一部アップ可能となるよう目下準備中です。アクセス・閲覧の件数は昨秋以降急増しており、日本だけでなく、アメリカ合衆国をはじめ外国からの関心も高いことが確認されています。著者名で最も多く検索されるのは「倉橋惣三」ですが、倉橋は「倉橋生」と「SK生」などの別名でも投稿しているので、実数はさらに伸びます。

今回は、その倉橋惣三が生きた時代の「生活」という言葉に接近してみたいと思います。この四月から実施される改訂幼稚園教育要領は、平成元年の幼稚園教育要領の延長上にあるものですが、子どもの生活を基盤とした環境による保育を強調する趣旨は、倉橋が提

唱した「生活を生活で生活へ」という有名なフレーズともつながるものです。しかし、倉橋が活躍した大正期から二十世紀半ばのころの「生活」という言葉が、現代の「生活」とどの程度重なりのあるものなのか考える必要があるはずです。「生活」という語でキーワード検索して見いだした二つの記事を手がかりに、当時の「生活」という言葉の周辺を垣間見てみましょう。

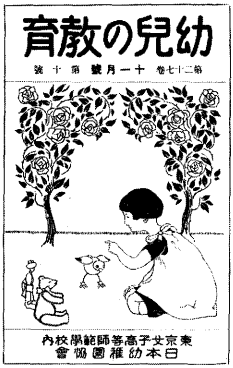
「兒童生活展覧會の印像記」から

第二七巻十号（一九二七年十一月発行）五十四～六十五頁掲載

著者は千束とあり、記事の内容から、東京女子高等師範学校附属幼稚園の教師であることがわかります。一九二七（昭和二）年十月九日～三十一日に東京・上野の東京博物館別館（当時）で「恵まれぬ都会の児童達のためにその日常生活を明るくし保健教育両方面から児童の資質向上に努めよう」[1]と文部省が玩具絵本改善研究会と協同して開催した「兒童生活展覧會」を訪れた印象について書かれています。幼稚園令公布の翌年、幼稚園教育が初めて単独で制度化された当時、都会に「恵まれぬ」子どもたちがいるという認識と、子どもの日常生活を「明るく」しようという危機感がうかがわれます。著者が勤める幼稚園は関東大震災で倒壊して三年、まだ仮園舎で保育をしていたころのことです。

この種の展覧会には附きもののクラブ（化粧品会社の名：浜口注）歯みがきの宣伝かたがたの蝋人形を用ひて歯の衛生を細かに示したものやら、同じくクラブの肝油はヴィタミンのAに富むとかキャベツはA・C含むとか云った栄養表もあった。（六〇頁）

行政的に幼・保が二元化する以前の時代であり、生活の質向上を科学的見地から啓発するために、文部省



『幼兒の教育』第27巻
第10号（1927年11月発行）
「兒童生活展覧會の印像記」
p54～p65

主催の展覧会で保健衛生習慣を啓発するような企画が「附きもの」だったようです（この種の博覧会が繰り返し開かれていたということでしょう）。また家庭へのいわゆる食育を促すために「おやつやお弁当のサンプル」が展示され、そこには「垂涎一糧の人々で人足が絶え」ず、「グリンピースの入れ方一つで目新しくもなったり、海苔一枚で私等が日常食べ馴れたものの面目が一新してゐる。聡明な母様は此等から得たヒントでこれに倍する御料理の数を殖される事だらう」と記されています。都市化された新興層の家庭では子育てや教育に時間を費やせる主婦層が形成されてきていた時代で、サンプルの前の「垂涎」には、そのような家庭生活様式への憧れも示唆されているのかもしれません。

幼稚園生活に関する記述を見てみましょう。番町幼稚園の出品物が好意的に紹介されています。「小供の家」が「果実屋」と「お菓子屋」に分かれて「お店ごっこに用いられる様」になっており、「幼児を連れて四つ谷公設市場に買ひ出しにゆく。果実の実物を観察し又多くを買ひ出して帰園後果実の写生をしその輪郭を切り抜き果実屋の店頭に並らべる」と説明されています。「いびつなリンゴ」も「了解に苦しむバナナの房」もあったが「真の小供の力の躍動に輝いて」いて、「力の限り形に表現してその出来上がったもの」による活動を高く評価しています。保育課程に「観察」の項目が加わった当時、一つの理想として紹介されている活動は、現代のプロジェクトメソッドカリキュラムに類似しています。大正時代から日本の教育

界に新しい風を呼んだ生活カリキュラムの幼稚園版ともいえ、倉橋による後の「誘導保育案」構想に結びついていくと考えられます。番町幼稚園のコーナーでは「幼児のメンタルテスト[2]と、体格との統計が出てゐたが惜しいかな時間に追はれてそのまま。」とあります。身体的精神的発達についての数量的測定が、当時の保育者の重大な関心事であったことがうかがえます。

一方で、「小手先きの器用」を誇示するような作品の展示に対して、著者の千束は次のように慨嘆しています。この嘆きはまだ過去のものとはなっていないのではないでしょうか。

……これが昭和二年の幼稚園の出品だらうか。

小手先きの器用が何ほどの価値があらう。その価値を無視するのではないけれどもより大切な事は、内に養われ培われてゆく実力ではなからうか。二十世紀は人を生まねばならぬ。小手先きが器用になったのみでこれこれのものが上手に出来ますと意気込むのは誤算である。私は器用な幼児を多く見る。けれどもこれを人として客観する時多くの失望を感じる。考へて欲しい。本当に考へて欲しい。人を造り出す保育であると云ふことを。（五十六頁）

「保育生活感想（抄）―子供と共に生きる―」から
第三三巻五号（一九三三年五月発行）
五十～五十一頁

これは一九三三（昭和八）年の記事で、「ある保姆養成所」の「生徒の保育実習感想摘記」であると説明されています。私は現在四年制大学で幼稚園実習関連の授業を担当しているので、七六年も前の学生がどのような記録を書いたのか非常に興味がありました。

自由遊びが大切だと聞いてゐたが、実習に出て始め

てそれを感じました。幼稚園へ出てゐると其の間、自分個人の心配事とか又しやくに触ってゐたというような事はすっかり忘れてしまふ。本当に不思議な程です。（A子）

昭和初期すでに「自由遊びは大切だ」という養成原理は徹底されていたと見えます。また「子供」と出会うと自分の心もちが変わることへの省察と、「子供の力」への驚きがあります。次のC子、D子の記録には、「子供の内部」の洞察と、「子供」と共にあることの喜びが表現されています。

『先生』と側に寄ってくる。子供のその短い言葉の裏にどれだけ多くの意味が含まれてゐる事だらう。それは個々によってすべて異った意味を示してゐる事と感じ得た。……ぢいっと無言で見上げるその顔一つで大体何を語り欲しているかをどんな要求を私に持ってゐるかを察し得る程、それ程私は子供の内部に親しんで来ることが出来たことをどう云ったらいいかわからない程うれしく思ふ。（C子）

口では命令的に叱ってゐるようでも本当に心の中でその子供を愛しその子の為を思ひその子供の心に共鳴してゐるならば、よくその心を汲みとってくれます。……友達もないのか淋しそうに皆の遊んでゐるのを眺めてゐる子供がありました。その姿があまりにもいぢらしく思ひ、同情させられてゐました。すると、自然にその心持が動作に現はれるのか、今日一番私を待ってゐてくれるのはこの子供です。（D子）

保育理解において現代の養成と大差ないようにも見えますが、精神分析的な幼児理解も、そして無論スイスの心理学者のジャン・ピアジェの発達心理学も、ま

た脳科学もまだ浸透していなかった時代であることを考えると、現代の「理解」観とはおのずと異なるパラダイムを彼女たちは生きていたに違いありません。愛と共鳴によって「心持」や「要求」を察しくみとり合う関係であったのでしょうか。

紙数の関係で引用はできませんが、「子供と『友達』でありたい」という表現も、C子やD子の記述に共通して見られます。現代の保育者養成では、「友達」感覚ではなく、「保育者の専門性」を培えと指導されるのが一般的だと思います。でも、これは養成理論が変わったというよりも、二十歳前後の青年期の「大人性」が変化したことを示唆しているのかもしれないと考えられます。昭和初期の学生は、モラトリアムが長期化している現代の私たちに比べ、かなり「大人」であって、「子ども」性から距離をもてていたのではないか……であれば、幼児と「友達」感覚になったところで、保育者の専門性を身に付けることと矛盾はしないという生活感覚があったといえるのではないかと思うのです。

最後に、この記事のタイトルが「保育生活感想」であることについて。これは当時編集主幹であった倉橋が付けたのではないかと想像しているのですが（確証はありません）、いずれにしても、今であれば「保育実習感想」というところでしょう。こんなことにこだわっている私に、「実習も『生活』でしょう」と倉橋が笑いかけてくるようです。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻 幼児教育・保育人間学）

注

1 「今秋上野に開く兒童生活展覧會」『幼児の教育』日本幼稚園協会、第二七巻八月号（一九二七年九月発行）七十八～七十九頁掲載
（引用文の旧漢字は新漢字に直した。ひらがな表記および送りはまま。以下も同様）

2 三木知一郎の「一般素質検査」とある

保育の現場から

子どもの姿が語るもの

―四月・三歳児・女児A子の姿を通して―

山田徹志

はじめに

保育の中で「子どもと共に生活し、気づくこと」。それは、「子どもの姿には、私が思う以上に隠されたメッセージがある」ということです。そう感じさせるエピソードを、実際の保育の中から紹介していきたいと思います。

言葉ではないものが語るもの

四月、朝、登園時、保護者に「行ってきます」と言い、自分から母親から離れ保育室に入る女児A子。A子は登園後、私の背中に抱きつき泣き出しました。私は、「何で泣いてるのか?」と内心で疑問を抱きながらA子の姿を追うことにしました。約一〇分間、A子は私に抱きつき泣き続けました。A子が私の背中でただ泣く姿に、私はA子に対する愛しさを感じずにはいられませんでした。しばらくして、A子は自分で泣き止み、無言で私の元を離れていきました。

このA子の抱きつきながら泣き、しばらくして保育者の元を無言で離れるという行動は、二週間ほど、毎

日続きました。

しかし、二週間を過ぎるとピタリとその行動はなくなりましたが、私は、A子の温もりを朝背中で感じることのできないことに少々の寂しさを覚えました。一方、A子は笑顔で登園すると、私に突然「あなたのお名前は何?」とひと言尋ねてきました。

A子が泣くことの真意は、むろんA子本人にしかわかりませんし、A子自身にとってもわからなかったことであると思います。不安で泣いていたのか。何か嫌なことが実際に登園までにあるのか……。保護者とも話す機会をもつもののその理由はわかりませんでした。ただ、A子の姿が二週間で変わったことは確かであり、A子がその後、保育者に対して抱きつきながら泣くことはなかったのです。A子の姿が変わるまでの過程には何があったのでしょうか。

なぜ、A子は抱きつくのか。おそらく、それはA子が全身を使って私を認識しようとしていたのではないかと考えます。実際にA子が自分で他者の体に触れ、その温かさや匂いや質感など多くの情報を五感で感じ取り、私の存在を確かめていたのではないでしょうか。毎日、繰り返し私の体の同じ箇所に触れ、ある程度の時間が経過すると離れていく。この行動をする中で、A子は「ここに来ればこの人がいる」ということを確かめ、ある程度の時間をかけ、自分の心の安定を図っていたのだと感じます。

A子は、自分の気持ちの切り替えを行うために、登園後この行動を無意識に行っていたのではないでしょうか。何度も相手に触れ、その存在を確かめ、自分の感情を他者にさらけ出す。たとえるならば、乳児と親との間で形成するアタッチメント（愛着形成）に似た作業のようにです。まさに、「信頼関係」の生まれなのだと思います。この信頼関係が「あなたお名前は何?」というA子の、保育者に対して自らが働きかける姿を生んだのだと考えると同時に、A子の姿の変化

から、子どもと保育者との間に生まれる信頼関係が子どもの自己を発揮するうえでも大きな働きがあるのだと感じさせてくれます。

では、本当にA子の姿の変化は信頼関係の形成だけにあったのでしょうか。そう考えさせられたのは、この出来事と並行してA子の「遊び」にも大きな変化が現れてからでした。A子の遊びの変化が、A子に対する私の理解をより深いものにしてくれました。

積み木トイレ
～A子の遊びの変化から～

入園当初のこの時期、私の園では保育室に幾つかの遊びのコーナーを設けて子どもたちが自分で好きな遊びを行えるような保育室環境をつくります。

登園後、まだ、A子が泣いていた時期のことです。A子は泣き止んだ後、保育室を歩き回っていました。しばらく保育室を歩き回ると、井形ブロックや油粘土などさまざまな遊びコーナーに自分から足を運び椅子に座り遊びの準備をするのですが、ほとんど座っているだけで遊ぼうとはしませんでした。私はA子に「こんな遊びがあるよ」と声をかけてみたり、遊びコーナーに座ったときに共に遊んでみたりもしました。

しかし、A子の応答はなく、私が隣に座るとすぐに別の遊びコーナーに移っていきました。私は、A子が自分の遊びたいものを繰り返し遊びコーナーを回ることで見つけようとしているのだと考え、A子の姿を離れた距離で見ることにしました。A子の遊びコーナーを転々とする姿は二週間ほど続きました。

そして、A子が登園後、保育者に抱きつきながら泣くという行動を行わなくなったのとほぼ同時期に、A子は積み木のコーナーから移動することなく一つの遊びを繰り返し行うようになりました。私は、A子の横に座りA子の様子を伺いながら、A子に働きかけることなく卓上積み木で遊んでみました。するとA子は、

何やら独り言を繰り返して何度も積み木で遊んでいたのです。

A子は「和式です。洋式です。トイレ流すのジャー」と独り言を発しながら積み木で作ったトイレを壊してはまた作りを繰り返していました。私は初め、A子が積み木を使ってトイレを作るという遊びの中で、自分の作りたいと思うものを形にすることにおもしろみを感じているだと考えました。A子が遊びコーナーの中から自分で積み木遊びという遊びを見つけ出し、その

「遊び」におもしろみを見いだしたことがA子の自信にもなり、登園することの目的につながっていったかのように思いました。つまり、A子が泣きやんだ姿の背景には遊びの充実があったからだと考えたのです。しかし、A子の遊びの変化に対しての私の考えは、A子のある行動から変わっていきました。

積み木トイレのメッセージ

A子が積み木遊びをするようになり、間もなくのことです。トイレに行って用を足し終わると「シッコでた！　ふいて流した！　幼稚園のトイレは和式だよ！」と私にたびたび報告するようになりました。幼稚園のトイレは洋式ですが、オマルのような形状をしており、確かにA子が言うように和式トイレに見えるのです。また、この遊びをする以前、A子が幼稚園でトイレに行く姿はありませんでした。A子の積み木トイレを作る姿は、登園初日から三週間後になくなりま

した。同時に幼稚園でトイレを行った後の報告がなくなりました。

後に、A子の母親にトイレの積み木遊びの様子とトイレに行った後に発した言葉について報告すると、A子の母から「幼稚園でトイレ行くけど出ないの」と、A子が時どき家で話していたことも知ることができました。

A子は幼稚園でのトイレに抵抗があり、それを自分の力で乗り越えたことに自信をもち、それがA子の登園する姿を変えていったのではないでしょうか。つまり、A子が積み木でトイレを作っていた理由は、幼稚園のトイレに行くという生活のイメージを照らし合わせながら行われた遊びだったのではないかということです。

A子の変化の真意

A子の積み木遊びが幼稚園のトイレに対する不安に結びついていたとするならば、それは、「遊び」と「生活」との関係性は極めて密接であることを示しているのだと考えられます。A子が幼稚園のトイレに行くという不安を乗り越えたことが積み木遊びのA子の姿に結びついたのではないでしょうか。

A子の変化の真意は「生活」の中にこそあったのではないでしょうか。何故(なにゆえ)に「生活」中にあったのか。それは、A子の「積み木遊び」という自己活動の中に幼稚園のトイレに行くというA子の「生活」における内面の課題が表現されていたと考えるからです。だとすると、A子にとって「遊び」も「生活」の一部であり、「生活」も「遊び」の一部だとは考えられはしないでしょうか。A子の姿を追ううえで、少なくともA子の変化の過程が生活と遊びが相互に作用し合っていたのではないでしょうか。

つまり、A子が幼稚園でトイレに行くということへの不安を、「遊び」「生活」を通して解消していったの

だと考えます。また、A子と私の間において、言葉ではなく体で感じ互いの存在を確かめ合うことで生まれたであろう信頼関係は、A子が幼稚園でのトイレに対する不安を自分で乗り越えようとする心の土台となったのではないかと感じます。

おわりに

A子の姿を追うことで、見えてきたA子の思い。そこに、言葉はほとんど存在しませんでしたが、日を追うごとに変わっていくA子の姿にA子の思いは込められていたのだと感じます。

保育の中で、子どもの姿に隠されているメッセージはさまざまな場面に存在すると思います。本稿で焦点を当ててきたA子について言えば、「泣く」という目につきやすい行動から保育者側も子どもの姿に注意がいきやすかった事例だと思います。

しかし、日々の保育の場面では、ふとした子どものひと言や小さな表情や行動、一つひとつに子どものメッセージが込められているのだとA子の姿を通して改めて感じます。

私は、保育の経験年数を経るごとに学級運営や行事などに目がいきがちになり、一人ひとりの子どもが見せる姿を当り前のようにとらえてはいないだろうかと、最近自分自身に疑問を抱きます。私は子どもに寄り添い、個々の特性をとらえながら保育をしたいと思っています。しかし現実には日々の生活に流され、本当の子どもの姿を見失いがちになってしまっていることを、子どもたちは時折、私に気づかせてくれます。

子どもの姿が私に語りかけてくれること。それは、その「語りかけ」にどれだけ私が気づけ、応えられるかということ。この、「気づく力」と「応答する力」を通して、私は常に子どもから課題を与えられている者であると感じずにはいられません。

（国立音楽大学附属幼稚園　教諭）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(28)〉

『ガラス絵』から見えるもの

― 重層的保育の実践から考える ―

佐治由美子

お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）では、二〇〇八年度より保育室の大きな窓ガラスへのペインティングを始めている。これは、一・二歳児という幼い人たちの描画としては大がかりな取り組みだといえよう。

このガラス絵の活動を通して、子どもたちと保育士との間に何が生みだされようとしているのか、その記録から見ていきたいと思う。まず、その経緯を振り返っておく。

「ステンドグラスシート」から「ガラス絵」へ

二〇〇七年度の冬のこと、保育士たちがステンドグラスシートを囲み、どんな形に切って子どもたちに提供しようかと知恵を出し合っていた。その場に居合わせた私は、一枚一枚が、淡く柔らかい一色のシートであることから、その色を子どもたちがイメージの中に活かすことができるように、単純な形状の物で提供してほしいとお願いした。そして、子

どもたちがそのシートを並べたり組み合わせたりして創った作品を、光を通してじっくり眺める、そんな鑑賞可能なスペースがあればと、ふとわきおこった願いを語った。

翌年度になり、子どもたちのステンドグラスシートの活動を支える教材として、光を通す透明な素材でできたボードを探し始めたが、保育室で使えるような安定した形状の物はなかなか見つからなかった。そこで、保育士と大学教員が協働して、乳幼児にふさわしいクリアボードの開発[1]ができないだろうかと、話は一気に膨らんだ。

そのころのナーサリーは、描画を盛んに行っていた。画用紙に描く活動だけでなく、床一面に広げた模造紙の上で、子どもたちが思い思いに絵筆を動かしたり足形をつけたりして水平方向の広がりを全身で表現する活動も行われていた。またその一方で、子どもの背丈より高いイーゼルが、保育士たちの手で段ボールを切り出すことによって作成された。壁に沿ってやや斜めに設(しつら)えられたその巨大なイーゼルの出現によって、子どもたちはしゃがんだり立ち上がったりして、垂直方向に伸びゆく線を盛んに描くようになっていた。日に日に用意される環境で、子どもたちは縦にも横にも伸びやかに描く体験を重ねていたのである。

そのような日々の中にいた保育士たちは、クリアボードの開発を考え始めたときに、ステンドグラスシートを貼るだけでなくそこに絵も描けるような多目的なボードであることを願った。シートも貼り易く絵を描いたり消したりし易い素材は何なのか、また、保育室の中で転倒しにくいボードのデザイン、転倒するような非常時にもその破片が飛び散りにくい素材は何なのかなど、考えていかなければならない問題は幾つもあった。

しかし、保育士たちは夢をもち続け、子どもたち

と試せることをいろいろにやってみようと、その前向きな姿勢が変わることはなかった。このような取り組みの中で生まれてきたのが、〝ガラス窓ペインティング〟である。

はらぺこあおむしと草むらへ

ナーサリーは、二〇〇八年度四月より自然環境をテーマとする研究[2]にも取り組んでいる。日ごろから天気がよければ散歩を日課とし、大学キャンパス内に残されている自然に親しむ実践を蓄積しているナーサリーにとって、この研究は保育士たちの意欲を高める新たなきっかけとなっていた。

その春には、ナーサリーで育てたアオムシがさなぎからチョウにかわる瞬間を、保育士たちは子どもたちと共に迎える機会にも恵まれた。その驚きに満ちた体験が子どもたちと共有され、それ以来子どもたちは『はらぺこあおむし[3]』のお話が大好きになり、繰り返し聴いて楽しむようになっていた。

そんな夏の日のこと、『はらぺこあおむし』のパネルシアターを見た子どもたちは、アオムシがチョウに変わった一瞬を再現するかのように手をバタバタさせて動き出した。そして、保育士たちがステンドグラスシートで作ったチョウやアオムシを窓ガラスに貼ると、それは光の中に浮かび上がって子どもたちのイメージを一層膨らませる素材となっていた。

窓ガラスの草むら[4]の中に貼られたアオムシに、保育士が「モゾモゾ……」と言いながら絵筆を近づけると、子どもたちは吸い寄せられるように集まってきて絵筆をとり、小さな線をそれぞれに描き始めた。

これが子どもたちの「ガラス絵」の始まりである。

窓ガラスのこちら側と向こう側

ガラス面に描くことは、紙に描くこととどんな違いがあるのだろうか。子どもの様子と重ね合わせな

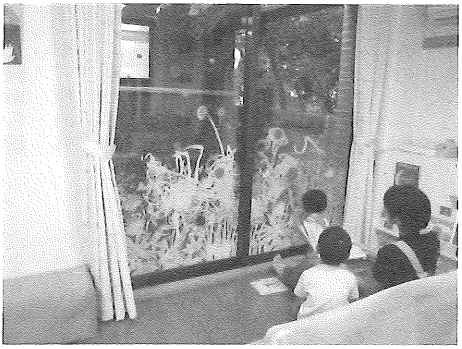
がら考えていきたい。

ある日保育士が、ステンドグラスシートのチョウのそばに、それが飛んだ軌跡のような線を窓ガラスの内側から描いてみた。すると、窓ガラスの外側にいた子どもたちが、その線を追いかけるように描き始めた。保育士がゆっくり描くと子どもたちもゆっくりと、また速く動かすと速い動きになる。窓ガラスのこちらと向こうとで、ささやかなやりとりが始まったのである。

ガラス面という透き通ったキャンバスに、保育士と子どもが、また子どもと子どもが対面し、お互いのイメージを表現し合う対話的な描画活動が展開する兆しが、ここに見えている。

このときのように実際に絵筆で表現し合う活動も

▲写真1：ガラス絵を指でなぞる



▲写真2：ベンチに座ってガラス絵を眺める

▲写真3：ガラス絵を反対側から見つめる

あれば、子どもの描いた線を保育士が反対側から指でなぞって楽しみ合う場面展開（写真1）や、窓の外側で描かれる子どもの絵を室内のベンチに座って鑑賞する子どもの出現（写真2）、また、自ら這っていき窓の内側からニコニコ眺める乳児とのやりとり（写真3）など、次々に対話的な場面が見られるようになっていった。

ガラス越しの対面は、その意味するものを内側から考えると、言葉のやりとりによる保育がむしろ閉ざされていることに気づかされる。しかし、ここに、子どもと保育士との関係が、対話的であるよう促されるという逆説が成立すると考えることもできよう。

言葉巧みである大人たちは、〝ことば〟獲得の始まりにいる子どもたちのイメージを無意識裡にからめとり、ロゴスの世界にもち去ってしまいやすい存在である。そんな大人たちが言葉を封じられることにより、子どもの〝ことば〟にならないイメージをただそのままに受けとらざるを得ない状況に置かれる。意味するものがよくわからなくても応答的であろうとする保育者と子どもとの、その関係の中にこそ生成する保育の営みの基本に、大人たちを立ち返らせてくれる、そのような側面がガラス絵には垣間見えているように思う。

ガラス絵を描く子どもたちにとって、まず両足でその場に立って絵筆をのせていくこちら側の世界があり、そこには並んで時どき笑顔を向け合う友達や背後で絵の具のお世話をしながら見守る保育士がいる。そして、描いているガラスの隙間からは、興味津々でこちらを見ている保育士や友達が見えて、向こう側の明るい世界がこちらの世界の居心地を一層快適なものへと映し出してくれているようである。

子どもを背後からも向こう側からも、その意味において重層的な関係の中で支えていく保育は、表現

する子どもの自己を強めずにはいないであろう。子どもの内なるイメージが具現化し、そのことによって子どもが自己を形づくっていこうとするプロセスの中に、ガラス絵活動の環境のすべてが位置付いているといえるのではないだろうか。

私は、このガラス絵活動をナーサリーの重層的保育の実践として取り上げた。「重層的保育」とは、層をなして育ち合う保育の営みを意味している。子ども一人ひとりが自己や他者との対話によって自己形成していくのを支える保育の場を前提としている。しかし、ここでの営みは、保育者集団が初めから共通の子ども理解に立つことを求めるものではない。保育者個々の完全ではあり得ない子ども理解が、保育の場で開かれてある中で相互に作用し合いつながり合っていく、そのような保育者間の連携が、子どもも保育者も共に育ち合う保育の場を形成する力になるのではないかと考えている。

ナーサリーにおいて、またそのほかの多くの保育の場において、まず子どもがじっくりと自分自身と対話し、さらに自分とは異なる存在である他者と対話することを通して、いつしか共に新しい価値を築いていこうとする人同士へと育ちゆく、そのような自己形成の土台となる保育が、脈々と実践されていくことを願ってやまない。

（お茶の水女子大学　幼保プロジェクト　専任講師）

注

1　レッジョ・エミリアの実践にも同様の透明素材が活用されているが、乳児保育の教材としてはこれからの研究が待たれている

2　お茶の水女子大学キャンパス内にある附属校間の連携研究

3　絵本『はらぺこあおむし』　エリック・カール／さくもりひさし／やく、偕成社

4　草むらはガラス片飛散防止シートの絵柄のこと

編集後記

入園進級の4月、本誌では2つの春らしいコーナーが始まりました。その1つが津吹先生の虫の連載。私は先生の自然教室に参加したことがありますが、虫を見つけては先生が「これはどんなにおいかな」と、くんくんかいでいる姿を目の当たりにし、「虫をかぐ」という見方もあるのかと、驚き感動しました。徹底的に虫の立場に立とうとする姿勢は、全身の感覚で相手に近づこうとする保育者の姿に通じます。

もう1つの新コーナー「ひととき」では、松井先生が4月らしい絵本を紹介してくださいました。このコーナーでは、折に触れていろいろな方に耳寄りなお話を提供していただく予定です。また今号は意欲的な実践研究を多く掲載しております。皆様のご寄稿をお待ちしております。　（H）

幼児の教育　第108巻　第4号

平成21年4月1日発行
編集兼発行人　浜口順子
編集部　永山　綾
発行所　日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所　株式会社　フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振　替　00190-2-19640
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵　ヨシエ
扉カット　ヨシエ
扉題字　津守　眞
カット　田崎トシ子
編集委員　上坂元絵里
髙橋陽子

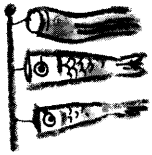
ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

＜特集＞ 子どもと土

平田智久・庄籠道子・箕輪潤子・南陽慶子

・発達心理学者の子育て奮戦記（7）　長田瑞恵



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/ へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jp までお寄せ下さい。

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

新刊

手づくりアンパンマンといっしょ③

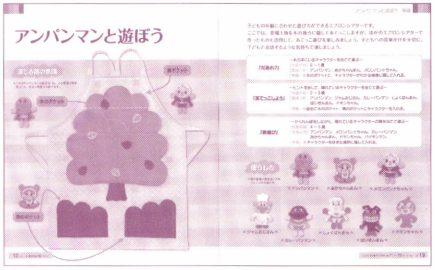
エプロンシアター®

中谷真弓／著

子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ実技書の第３弾！「ジャムおじさんの誕生日」「アンパンマンと遊ぼう『だあれ？』『あてっこしよう』『数遊び』」「みんなで カレーパーティー」「みんなで おかたづけ」など、乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つエプロンシアターを紹介しています。

26×21cm　80ページ　定価 1,995円(税込)

10903



好評発売中!!

わくわく☆おもちゃ

10901

島田明美・尾田芳子・チームYamy／著

26×21cm　88ページ　定価 1,995円(税込)

かんたん ギフト

10902

千金美穂・尾田芳子・あかまあきこ／著

26×21cm　80ページ　定価 1,995円(税込)

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇八巻　第四号　平成二十一年四月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

好評発売中

「環境保育」って何？

「子どもが大切にされ、自然・人・地域・社会としっかりつながって育てられてこそ、環境教育の土台ができる」それが、**環境保育**！

いつでもどこでも 環境保育

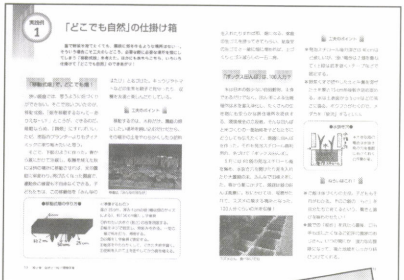
―自然・人・未来へつなぐ保育実践―

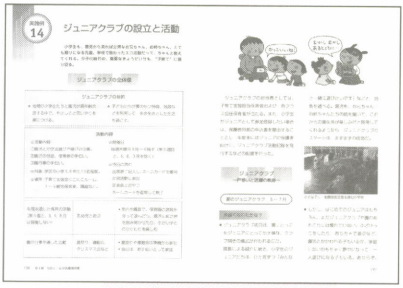
有賀克明／編著

乳幼児にかかわる仕事こそ、地球の未来を切り拓きます。自然につながり、人・地域・社会とつながる保育を通じて、環境教育のしっかりとした土台を築き上げる新しい保育思想と実践、環境保育の誕生！

21×15cm　224ページ　定価2,100円（税込）

10730





CONTENTS

はじめに
第１章　環境保育はいつでもどこでも
第２章　自然とつなぐ環境保育
第３章　人とつなぐ環境保育
第４章　社会とつながる環境保育
第５章　子どものつぶやきに学ぶ環境保育
第６章　座談会　子どもと自然と環境保育
環境保育実践と明日への希望
おわりに

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。